

算数

➡ 1年生 | 「大きい かず」

類推して考える場を設定し、
説明する力を育成する

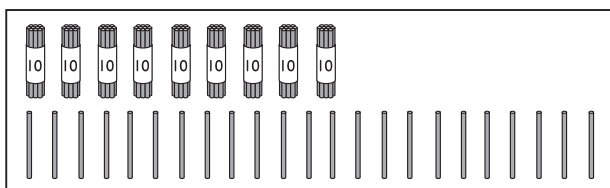
1. はじめに

私は子どもたちに、既習事項を活用しながら根拠を明確にし、「なぜそうなるのか」を自分の言葉で説明する力をつけたいと思っている。そのためには、見通しをもち、類推して考える場を設定することが大切であると考え、初めての課題に対して『結果の見通し』をもち、『方法の見通し』をもつ学習を繰り返しておこなっている。

2. 見通しをもつ

数の学習においては、具体的なものの個数を数えることから始め、実際に10のまとまりを作る体験を授業の中で繰り返しおこなってきた。これは、「10のまとまりがいくつと、ばらがいくつ」と数えることのよさを実感させるためである。

初めて100をこえる数を学習する時、下の図のように数え棒を掲示し、子どもたちに「何本くらいありそうですか」と聞いた。



これに対し子どもたちは、「90本よりはたくさんありそうです。わけは、10の束が9つで90、それと1のばらがたくさんあるからです」と、100までの数を学習した時と同じように考え、『結果の見通し』をもつことができた。

その後、「どうすればわかりやすく数えられそうですか」と聞いた。すると、「1のばらがたくさんあるので、10の束を作ればわかりやすく数えられると思います。わけは、今までたくさんあるもの

を数える時は、10の束を作って数えるとわかりやすかったからです」と答え、これまでの学習から「10の束を作る」という『方法の見通し』をもつことができた。

3. 自分の言葉で説明する

このように、見通しをもつ学習を繰り返すことで、初めて出合う課題に対しても思考を止めず、既習事項を活用して「どうしたらよいか」を考えられるようになる。既習事項から類推して考え、自分の言葉で説明する場をきちんと設定することで、子どもたちの説明する力は育成されると私は考える。

4. おわりに

授業では、子どもがもった見通しとその理由を述べさせるようにし、理解を確実なものにしていった。

しかし、集団解決の場面では自信がもてず、考えたことを発表しづらい子どももいる。そこで、ペアで話し合う時間を取り入れ、自分の考えを相手に伝える機会を大切にしたい。

また、見通しをもっている子どもや、友だちの発言と自分の考えを比較しながら考える子どもが中心となって授業が進み、途中までなら説明ができそうだという子どもが発言しにくくなることがある。そこで、発表の途中で止まってしまった場合には、他の子が意見をつないだり、発表者と同じような考えをもった子が説明したりするようにして、全ての子どもが問題解決を目指して考えを深められる場になるようにした。

今後も、児童全員が説明できる場と、発表しやすい雰囲気作りを心がけ、説明する力の育成に取り組んでいきたい。